

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学 専攻	リハビリテーション 修士 課程	修了年度	2021 年度
氏名	鍛冶 宏宣		指導教員 (主査)	兵頭甲子太郎

論文題目	回復期リハビリテーション病棟退院後の外出頻度に関連する因子について - 病棟内の移動が自立した患者を対象として -
------	--

本文概要

【目的】

回復期リハビリテーション病棟退院後の外出頻度に関する調査を行い、入院期間に実施するリハビリテーション評価と外出頻度と、閉じこもりの間にどのような関係性があるかについて、閉じこもりの要因について調査した。

【方法】

発症前に屋外歩行が一人で行えており、入院中に病棟内の ADL にて日中の屋内歩行が自立・修正自立となった 65 歳以上で研究に同意を得られた 54 名を対象とした。発症前の社会的活動を社会活動指標にて調査した。退院時の身体機能評価として自立歩行までの期間、10m 最大歩行速度、TUG、最大歩行距離、FBS、精神的評価として MFES、GDS 短縮版を調査した。退院後の外出頻度をアンケート調査にて行った。外出頻度と各評価の相関を Spearman の順位相関係数、閉じこもり、非閉じこもりを目的変数として、独立変数には、社会的活動、FBS、最大歩行距離、自立歩行までの期間、GDS 短縮版を選択し、ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

外出頻度と TUG 「 $\rho = -0.29$ 、 $p < 0.05$ 」、FBS 「 $\rho = 0.42$ 、 $p < 0.01$ 」、最大歩行距離 「 $\rho = 0.44$ 、 $p < 0.01$ 」に相関がみられた。閉じこもり群は 17 名、非閉じこもり群は 37 名であった。多重ロジスティック回帰分析にて、閉じこもりの要因となる項目として、最大歩行距離が選択された。

【考察】

退院後の外出頻度に関連する身体的機能評価は最大歩行距離や FBS、TUG であった。入院中より最大歩行距離の評価することで、退院後の閉じこもり患者を予測し、閉じこもりによる活動量の低下による廃用症候群を予防、退院後の活動・地域参加を支援出来るのではないかと考える。